

芭蕉発句試論

——「池をめぐりて」——

はじめに

名月や池をめぐりて夜もすがら

芭蕉の発句は、しばしばこの俳諧師の自伝として読まれる。『雑談集』に「丁卯のとし芭蕉庵の月みんとて舟催して参りたれば」という詞書が見られる以上、貞享三（二六八六）年八月十五日、⁽¹⁾芭蕉は中秋の名月を見て、「池をめぐりて」という句をものしたと考えるのは、当然かもしれない。しかし、発句は必ずしも近代的写生の産物ではない。中秋の名月を見れば、たちまち「名月や」の一語が生まれ、作者芭蕉が一晩中池をぐるぐるまわれば「池をめぐりて夜もすがら」と表現されるかという、決してそんなことはない。「池をめぐりて」

西原大輔

の句は、ややもすると正岡子規流の写生句と見なされがちだ。以下にあげる解釈は、この作品を触目の句と見ている。

○今夜は仲秋の名月、その清光の池水に映えるあたりを独り徘徊し、夜もすがら佳興に酔ったことである。（小学館、日本古典文学全集）⁽²⁾

○今宵は待ちに待った仲秋の名月である。私は独り草庵での月見を楽しむことになったが、池水に映える清光を賞し、逍遙をつづけているうちに、いつの間にか夜を徹してしまったのだった。（井上敏幸）⁽³⁾

○名月に誘われ、月影の宿る池の回りをただ忘我の境地で、独り黙然といつまでも歩き続ける。（今栄威）⁽⁴⁾

これらの解釈は一見正しいように見えるが、発句を現実描写の産物とする点にいたっては、あまりも写実主義に過ぎよう。この句を現実描写と見る立場は、一つの問題点を孕んでいる。即ち、「夜もすがら」の部分である。この語は、一晩中という意味である。作者芭蕉が実際に徹夜をして池の周囲ばかりぐるぐるとまわり続けたと取るのは、あまりにも滑稽であり、実際にあったこととも思われぬ。従って評者たちは、この部分を合理化して、次のように述べる。

○実際に池をめぐる夜を明かしたかどうかは、さして重要な問題ではない。(小学館、日本古典文学全集)

○「夜もすがら」は一晩中の意だが、時の経過を忘れる忘我の心を現す。(新潮日本古典集成)

○月光を浴びながらどこまでも歩いていたい一種の忘我に近い状態が「夜もすがら」だ。(山本健吉、日本古典文庫)

夜を明かしたかどうか「さして重要な問題ではない」のならば、芭蕉が仲秋の名月を見たかどうか「さして重要な問題ではない」とも言えるし、この池が芭蕉庵の池かどうか「さして重要な問題ではな」くなくなってしまふ。つまり、句を現実描写と認めつつ、「夜もすがら」だけは字句どおりに取らないという矛盾を生じている。また、「夜もすがら」を忘我

の心を表現した文学的修辭と見るならば、「池をめぐる」も、実際に池の周りをぐるぐるまわったのではなく、単なる文学的修辭だという考え方も成立するわけで、どの部分が現実描写で、どの部分が修辭なのかという区別は、解釈者の主観に頼るほかない。

これらは、作品内の「私」を、作家の芭蕉と置き換えている所から来る矛盾なのである。例えば、小説に登場する主人公を作者だと決めつけると、伝記的事実と食い違いを生じざるを得ない。これと同様の事態が、「池をめぐる」で起こっている。では、発句という短詩に、作者ならぬ「私」が登場してくるというのは、いったい何であろうか。合理的説明を得るためには、どう考えるべきか。

芭蕉以前の俳諧は、言葉をもて遊ぶ知的遊戯であった。貞門の俳諧は、連歌に対抗して、『御傘』や『誹諧初学抄』といった自分たちの式目を作り、言葉の使い方規則を設けようと努力した。一方、談林の俳諧は、自由奔放な発想を良しとして、破天荒な発句を残したが、これとて言葉の面白さが主眼であった。俳諧によって作者個人の実生活を描写しようとする意図は、極めて薄かったと言える。芭蕉は俳諧によって自分の日常を描く傾向が強かったとはいえず、先行する文学作品を強く意識しつつ創作を行った。「池をめぐる」の句は、李白水死伝説を意識した、一種の「本歌取り」になっている。

これが、本論文での私の仮説である。

一、李白の水死伝説

いまの南京のそばで、揚子江の南の岸に、采石磯という景色のよい所があります。ある時、李白はそこへ舟遊びに出かけました。それは月のよいばんでしたが、月の影が、くつきりと水の上になうつっていました。

李白はしばらくじっと、水のなかの月を見つめていましたが、ふいに、あのお月さまをつかまえるんだといって、水の中へ飛びこんでしまいました。

それが、この詩人のさいごであったといえます。もっとも、このお話は、すこしおもしろすぎるので、うそだろうという人もあります。なるほど、うそかも知れません。しかし、うそというものは、どこかその人の人がらをもとにして作られるものです。たとい、このお話はうそにしても、いかにも李白らしいお話ではありませんか。李白は、美しい事がらと、それをいいあらわす美しい言葉とをつかまえるようとして、一生を送った人です。水になうつった美しい月をつかまえようとして死んだというのは、いかにも李白らしいことです。それにまた、お月さまは、李白のよいお友だちでもあったのですから。⁽⁶⁾

これは、吉川幸次郎が子供向けに書いた李白の伝記の結末部分である。李白は、実際には西暦七六二（宝応王寅元）年十一月、当塗令であった李陽冰の宅で病歿した。葬られた場所が当塗県采石の竜山東麓であった。私は、芭蕉の「池をめぐるて」の句の下敷きに、この李白水死伝説があったのではないかと推測する。この伝説の出典は、五代に遡る。王定保の『唐摭言』には「唐李白遊采石江、因醉入江中、捉月而死」という記述があり、これが李白水死伝説の最も早い文献である。また宋代の『容齋隨筆』にも以下の記述がある。

世俗多言、李太白在當塗采石、因醉泛舟於江、見月影俯而取之、遂溺死、故其地有捉月臺

では、果たして芭蕉はこの伝説を知りえたであろうか。残念ながら、この伝説の日本における傳播について、まだ決定的な経路を見いだすことはできていない。『容齋隨筆』で「世俗多言」とあるように、李白の水死は、中国において既に民間の伝説であった。

『唐摭言』の記述によって芭蕉が知った可能性は低い。『唐摭言』を収める『唐人説會』は、「享和三年亥六・七・八・九・十番船改濟書籍目錄」に「新渡／唐人説會 袖珍 一部四套」とあるもの⁽⁷⁾、芭蕉の時代より一世紀以上後のものであり、ま

た『宮内庁書陵部蔵船載書目』（関西大学東西学術研究所、昭和四十七年一月）には、その名を見る事ができない。一方『容齋隨筆』は、『唐本類書考』に書名が見えるものの、寛延四（一七五二）年の資料であり、確証を欠くのである。

ただ、芭蕉が伝説を知り得た可能性を示唆する研究はある。仁枝忠氏は、『貝おほひ』序に使われている「釣月軒」という軒号の出典を考証している。そこでは、芭蕉が釣月の語を用いた理由が四つ挙げられているが、その一つに「月ヲ釣ル」を提示し、「李白は酔うて水中の月を捉へんとして溺死したとも傳へられ「李白捉月」の語もある」と述べている。李白を古人として慕った芭蕉が、多分にこの漢詩人を連想させる「釣月軒」という号を使用したのは、十分ありえる事であろう。事実、桃青という号も、李白の李を桃に換え、白を青にしたものであるとも言われる。

もちろん、たとえ芭蕉が李白水死伝説を知っていたとしても、「池をめぐりて」の句がそれを意識して作られたという確固たる証拠は、残念なことに存在しない。正統なる本歌取りと異なり、この句は読者に李白を暗示することはしていない。したがって、この小論で述べていることは後世の人の勝手なあらざるがなの思い入れにすぎない、どこにそんな証拠があるのだ、という批判も出てこよう。もしこの論文を芭蕉に見せて、どうです、李白を意識していたでしょう、と迫ったと

しても、芭蕉は答えてくれないだろうと思う。言ってみれば、この議論は創作者の材源の詮索であるから、これを解釈に反映させるのは、余りにも深読みだといえればそれまでかもしれない。しかし、以下「池をめぐりて」の句が李白水死伝説を踏まえたものであったと仮定したら、どのように読むことができるかを、一つの試みとして探ってみたいのである。

二、名月や

月を詠んだ和歌・俳句は数に限りがない。しかし、「名月」という言葉は、古代から広く使用されていたものではない。まず和歌から言えば、芭蕉以前に月を「メイ・ゲツ」と音読みの漢字二字で表現した例を、私は知らない。試みに『国歌大観』の類で「めいげつ」を引いて見ても、一首も見当たらない。勿論、名月は年に一度必ず存在するものであって、旧暦八月十五日の月が和歌に詠まれなかったというわけではない。「つき」や「望月」を詠み込んだ和歌は、それこそ無数にあるのだが、「名月」は和歌には見当たらないのである。名月が存在することと、それを「名月」として作品にすることは、自ずから別のことであろう。和歌の伝統には、「名月」は全く存在しないのである。

一方謡曲においては、「名月」が何度か現れている。『謡曲二百五十番集』の索引により、計八例を知ることができる。

名月清風唯動静の中にあれば(放下僧)

静かなる時には名月を見ず(放下僧)

名月に雨はじめて晴れり(羽衣)

名月に鞭をあげて駒を早め(小督)

八月十五夜名月にて候ふ程に(三井寺)

名月に向つて心を澄まいて(三井寺)

名月に舟を浮べ(融)

そも名月の其中に(融)

また俳諧では、『俳諧類松集』に「名月」の項目があり、また『毛吹草』(寛永・正保頃刊行)の「名月の夜はおもはずの日待哉」(正直)「名月は目星さへなき詠かな」(道二)のような例からも、「名月」の俳諧での使用が、必ずしも芭蕉の独創ではないことが窺える。

無論、謡曲や先行する俳諧作品から、芭蕉が「名月」という言葉を知ったことは十分考えられる。「名月」は、和歌の世界には見られない用語であるが、謡曲や俳諧には時折出現する。一方「名月」は漢籍、特に李白にとって大切な主題の一つであった。李白の月を題材にした漢詩は数多い。代表的なもの一つを挙げれば、

月下獨酌 月下の独酌

花間一壺酒

獨酌無相親

舉杯邀明月

對影成三人

月既不解飲

影徒隨我身

暫伴月將影

行樂須及春

我歌月徘徊

我舞影零亂

醒時同交歡

醉後各分散

永結無情遊

相期邈雲漢

花間一壺の酒

独酌相親しむ無し

杯を挙げて明月を邀え

影に對して三人を成す

月既に飲を解せず

影徒に我が身に隨う

暫く月と影とを伴うて

行樂須らく春に及ぶべし

我歌えは月徘徊し

我舞えは影零亂

醒時同じく交歡し

醉後各分散す

永く無情の遊を結び

相期して雲漢邈かなり (10)

中村俊定は、「埋火や壁には客の影ぼうし」(統猿蓑)の典故を「月下独酌」に求めている。李白と月との關係を物語る典型的な詩である。「明月」が登場する詩も数多い。

○明月落誰家

明月誰が家にか落つ(憶東山)

○我寄愁心與明月

我愁心を寄せて明月に与う（聞王昌齡左遷龍標遙有此寄）

○欲上青天覽明月

青天に上りて明月を覽んと欲す（宣州謝朓樓餞別校書叔雲）

○明月不歸沈碧海

明月帰らず碧海に沈み（哭晁卿衡）

○耐可乘明月／看花上酒船

耐る明月に乘じ／花を見て酒船に上る可し（秋浦歌其十二）

○明月出天山

明月天山より出づ（關山月）

○莫教明月去

明月をして去らしむる莫れ（宮中行樂詞其四）

このように、李白は明月に並々ならぬ関心を示しているが、「池をめぐりて」の句との関連から言って、次に挙げる作品が問題となる。この詩に示されている明月と詩人との関係に注目したい。

把酒問月

酒を把って月に問う

青天有月來幾時

青天月有りてより來のかた幾時ぞ

我今停杯一問之

我今杯を停めて一たび之に問う

人攀明月不可得

人は明月を攀ずる得可からず

月行却與人相隨

月行却って人と相隨う

皎如飛鏡臨丹闕

綠煙滅盡清揮發

但見宵從海上來

寧知曉向雲間歿

白兔搗藥秋復春

嫦娥孤棲與誰隣

今人不見古時月

今月曾經照古人

古人今人若流水

共看明月皆如此

唯願當歌對酒時

月光長照金樽裏

皎として飛鏡の丹闕に臨むが如く

綠煙滅し尽くして清揮發す

但だ見る宵に海上より來るを

寧んぞ知らん曉に雲間に向って没す

るを

白兔藥を搗きて秋復た春

嫦娥孤棲して誰とか隣す

今の人は見えず古時の月

今の月は曾經て古人を照らす

古人今人流水の若きも

共に明月を看る皆此の如し

唯だ願う歌に当たり酒に對するの時

月光の長く金樽の裏を照らさんこと

を

ここで注目したいのは、「今の人は見えず古時の月／今の月は曾經て古人を照らす／古人今人流水の若きも／共に明月を看る皆此の如し」という一節である。ここで「明月」は、古人を思ふ契機となっている。ただ単に「明月」を美しいものとして愛でるのではなく、古人へと連想を運ぶ材料となっている。「名月」という語は、和歌の伝統には全くない言葉であった。しかも、芭蕉は漢詩文に親しんだ天和年間以後になって「名

月」を使い始めたのである。李白の「明月」とは、第一に、醉狂の友であり、第二に古人への思いを起こさせるものであり、第三に、詩人を溺死させるほどの風狂をもたらしただものである。謡曲や俳諧からの影響もあり得ようが、ここでは芭蕉にとつて「名月」は李白の「明月」及び彼の水死伝説を強く意識させる言葉であったとの仮定に立ち、論を進めたい。

三、池をめぐりて

「めぐりて」という言葉については、以前「芭蕉発句考——「旅に病で」の句をめぐって——」⁽¹⁴⁾で検討したことがある。その論旨を繰り返せば、「廻る」は「謡曲」によって深化された歴史をもつ語で、例えば、次のように使われる。

○めぐりめぐり来ていつまでぞ、妄執を晴らし給へや(野

宮)

○廻り廻れども生死の海は離るまじや、(砧)

○廻り廻りて輪廻を離れぬ、妄執の雲の、塵積って(山姥)

○その執心の修羅の道、めぐりめぐりてまたここに(実盛)

○捨てても廻る世の中は(梅枝)

謡曲でのこれらの用法は、単にまわりをぐるぐるまわるといふ現象を指示するにとどまらず、そこには内面的な意味が付

与されている。「猛執」「執心」という言葉で言い換えられているように、「廻る」は、離れたくても離れられないという精神の状態を現象面において具体化した言葉である。つまり「廻る」の意味するところは、「そこにとどまってしまい、離れることができない」ということになる。即ち、「池をめぐりて」とは、字義どなりに読めば、「池をぐるぐる回って」であるが、芭蕉以前の文学伝統に即せば、「池にとどまって、離れない」と読むことができるのである。

ここでもう一つ問題になるのが、「池をめぐりて」の主語は何かという問題である。通説では、「芭蕉が」池をめぐるのでと解釈しており、これが何の疑問ももたれず、ごく当然のように考えられている。しかし、漢詩文の伝統で「めぐる」は、「夢繞」(夢は繞る)或いは「夢魂く繞」(夢魂は繞る)という慣用表現として用いられる。この伝統は、近代にまで続き、唱歌では「夢は今もめぐりて／忘れがたき故郷」と、故郷への執着が「夢はめぐりて」と表現されている。そしてこの「夢繞」は、しばしば「心随」(心は随ふ)、「心飛」(心は飛ぶ)という表現と対になって使用されるのである(拙稿「芭蕉発句考——「旅に病で」の句をめぐって——」参照)。勿論「芭蕉が一晩中池をぐるぐるまわる」という現象的即物的解釈も成り立つのではあるが、芭蕉以前の文学伝統に即すれば、「心(夢)は池にとどまって、離れることができない」という内面

重視の解釈も可能なのである。

ではなぜ芭蕉の心は、空にある名月ではなく、池の方にひかれるのか。それは、池の水面に「名月」が映っているからである。またここでは、李白水死伝説(李白捉月)を芭蕉が心に反芻しているからだという仮説に立っておく。しかも前に見たように、李白においては、「明月」は古人を偲ぶ契機となるものであった。月は古人を思わせるものであり、芭蕉は李白を古人として仰いでいたのである。

一つ、伝記的方面から述べれば、「池をめぐりて」が作られた日は、月見の船遊びをしたらしい。「雑談集」には「丁卯のとし芭蕉庵の月みんとて舟催して参りたれば」という詞書がある。「丁卯のとし」は貞享四年にあたる。この句が成立したのは貞享三年であるから、これは誤りであろう。「雑談集」には、これに続けて船遊びの記述が見られる。

すゝめて船にさそひ出しに、清影をあらそふ客の舟、大橋に坼れてさはぎければ、淋しき方に漕廻して、各句作をうかゞひけるに、仙化が従者、舳のかたに酒あたくめて有ながら

名月は汐になる、小舟哉

吼雲

翁をはじめ、我々も、かつ感じ、かつ耻て、九ツを聞て帰りにけり。「羽化登仙」の二字仙化に有とて、雲に吼け

んの心をとり、連衆みな半四郎とは云ざりけり。その後秀句も多し。

隅田川の大橋付近に、船遊びの客がわんさと繰り出していたため、わざわざ淋しい方に漕いでいったというのは、いかにも現世享樂的な十七世紀後半の江戸の行楽光景である。しかし、名月の夜の船遊びに際し、仮に芭蕉が李白水死伝説を知っていたにもかかわらず、この故事に思いを致さなかったとしたら、俳諧師としては些か迂闊であろう。「雑談集」では、「池をめぐりて」の句の後に船遊びの記述があることから、船遊びと句作の先後は逆かもしれないが、李白を思い起こす舞台装置はそろっていたと言えるのではあるまいか。

四、夜もすがら

「名月」が和歌の伝統に存在しなかったのに対し、「夜もすがら」は三十一文字の世界で充分にこなされた言葉である。「露」「袖」「濡る」等と共に使われて恋の歌ともなり、また「鹿」「虫」「くいな」などの音を「夜もすがら」聞くこともある。「夜もすがらきえかへりつる我が身かな涙の露にむすほれつつ」(『新古今和歌集』恋歌五)、或いは「やへむぐらしげれるやどはよもすがらむしのねきくぞとりどころなる」(『詞花和歌集』巻第三秋)などがそれである。しかし、何よりもまして用例

の多いのは、月が連想される場合である。

終夜見てをあかさむ秋の月こよひのそらにくもなからな
ん
〔拾遺和歌集〕 卷第三

夜もすがらそらすむ月をながむれば秋はあくるもしられ
ざりけり
〔後拾遺和歌集〕 卷第四

歌中に「あかさむ」「あくるも」と明示されている通り、「夜もすがら」は確かに一晩中を意味している。山本健吉が「池をめぐりて」の句の評釈で述べているように、「夜もすがら」を「一種の忘我に近い状態」と表現しても一向にかまわないであろうが、しかしそれは既に鑑賞の領域に属している。解釈の段階では、一晩中という以上の意味はないのである。やはり「夜もすがら」は一晩中なのである。

更に、「夜もすがら」と「月」を結びつける伝統は、謡曲でもそのまま踏襲された。「夜もすがら」がごくこなれた言葉であったことが理解できる。

月も曇らぬ夜もすがら（遊行柳）

月の夜もすがら昔をいざや語らん（生田敦盛）

夜もすがら月の影もさし出でて（梅）

夕月の夜もすがら舞樂を奏し見せ申し（寝覚）

菊をたたへて夜もすがら月の前にも友待つや（猩々）
夜もすがら馴れて月を汲まうよや（養老）

更け行く月の夜もすがら（生田）

そして、芭蕉の発句には「夜すがらや竹こほらするけさのしも」というものがある。ここでも明らかに、今朝の霜を取り上げている点からしても、「夜すがら」は夜通し・一晩中なのである。「夜もすがら」を「忘我」と読みかえるのは、既に鑑賞の域に踏み込んでいるといわざるを得ない。

おわりに

以上、李白水死伝説、「名月や」「池をめぐりて」「夜もすがら」と、順に検討してきた。「名月」という語は、和歌の伝統には全くない言葉であり、謡曲や芭蕉以前の俳諧で見られるものの、芭蕉は「名月」を、漢詩文に親しんだ天和年間以後になって使い始める。そしてここでは、「名月」は李白の「明月」及び彼の水死伝説を強く意識させる言葉であったとの仮説を立てた。その李白の「明月」とは、第一に、酔狂の友であり、第二に古人への思いを起こさせるものであり、第三に、詩人を溺死させるほどの風狂をもたらしただものであった。「池をめぐりて」の句で、芭蕉はこのような文学伝統を持つ「名月」「明月」に対面し、「名月や」と、切字を用いて客観化し

突き放す。しかる後に、芭蕉は「池をめぐりて夜もすがら」という七五を加えた。これは、「めぐる」の含意を重んずれば、一晚中心が池を離れないと読めるのである。これらを総合すれば、「池をめぐりて」の一句は、次に掲げる解釈が妥当だと考える。

李白は明月を友とし、水面に映った月をつかまえようとして溺死したという。池に映った中秋の名月を見るにつけ、風狂の余りに死んだ古人が思われるのである。私は月影が映ったこの池に、一晚中心がとどまって離れなかった。

注

- (1) 「丁卯のとし」は貞享四年にあたるが、これは『雑談集』の誤りで、句の成立は貞享三年が正しいとされている。これは秋の句であり、貞享四年三月刊の『孤松』に載るので、貞享三年の作と考えるのである。
- (2) 日本古典文学全集『松尾芭蕉集』（昭和四十七年、小学館）。
- (3) 『芭蕉講座』第四卷（昭和五十八年、有精堂）。
- (4) 新潮日本古典集成『芭蕉句集』（昭和五十七年、新潮社）。
- (5) 日本古典文庫『芭蕉名句集』（昭和五十二年、河出書房新社）。

(6) 「牡丹の花——李白のおはなし——」。『吉川幸次郎全集』第十一卷（筑摩書房、昭和四十三年八月）所収。

(7) 大庭脩著『江戸時代における唐船持渡書の研究』（昭和四十二年三月、関西大学東西学術研究所）。

(8) 向榮堂主人輯『唐本類書考』（寛延四年七月、平安書林）。渡来書の書名を集め記した目録。『容齋隨筆』は下巻五十四丁の表に挙がっている。

(9) 仁枝忠『芭蕉に影響した漢詩文』（教育出版センター、昭和四十七年十月）。

(10) 武部利男注『李白』（岩波書店、一九八三年九月）による。以下、漢詩の引用は同書による。

(11) 中村俊定監修『芭蕉事典』（春秋社、昭和五十三年六月）。

(12) 「名月」と「明月」については、当時から混乱が存在した。『旅寝論』には、「又明の字用る事は、和漢共に三五の清光をことに賞し來るゆへに、明と名とかよひたるを以て通用するべし。かやうの事はまゝ侍る也。又漢家には、名の字は三五兩夜共に用る事なし。我朝の古實なるゆへ也」とある。だからと言って、「明月」と「名月」は無関係なのではなく、漢詩の「明月」が俳諧の「名月」に影響を与えることも十分ありえよう。

(13) 「名月」が使われている芭蕉の発句は、全部で十四句ある。一番早い用例は、貞享元（一六八五）年作の「雪と雪今宵師走の名月歌」である。

(14) 『比較文学・文化論集』第七号（一九八九年十二月）所収。